

学歴社会の意識と語りに関する分析

意識の変化と階層性を中心に

The Statistical and Narrative Analysis on Academical Credential:
The Change and Distinction of Consciousness among Different Classes in Japanese Society

金 鎮淑
KIM, Junsuk

1. 問題関心と研究方法

本論文では、現代日本における学歴意識の構造と変化を分析し、その階層性を考察した。学歴意識の構造と変化をみるために、1975年度と1995年度のSSM調査データを利用して統計的な分析をした。調査年度を両年度に設定した理由は、学歴社会が形成された高度経済成長期独特の意識が出現するのが1975年度であり、社会構造が大きく変化しそれにもなう意識の変化をみることができるのが1995年度であると考えたからである。

学歴意識の構造とその変化をみるために、「成功志向性」と「メリットクラシー信念」という独自の分析概念を設定し、それを媒介変数として2段階の分析を実施した。まず、第1段階として、「成功志向性」と「メリットクラシー信念」の社会経済的な特徴を、年齢と階層を中心に分析し、必要場合は教育水準、職業威信と所得水準も分析した。媒介変数として「成功志向性」を設定したのは、学歴をめざす動機をみるためである。また、学歴社会が大衆化したのは、「努力すれば報われる」という努力主義に対する信念が広く拡大したことと関係があるとみなされてきたため、「努力主義」を含む「メリットクラシー信念」をもう一つの媒介変数とした。さらには、二つの媒介変数を詳細に考察するために、それらをそれぞれ次のような下位意識に細分化した。「成功志向性」は「金銭志向性」と「地位志向性」に、「メリットクラシー信念」は、1975年度には「才能信念」と「努力信念」に、1995年度には「実績信念」と「努力信念」に、である。

本論文では、学歴意識の変化を単なる冷却化現象とみなすのではなく、階層化現象として考察する視点を採用している。そのために、学齢期の子どもがいる親世代を対象にインタビュー調査を実施し、ブルデューのハビトゥス論を手がかりに分析したが、階級論に基づくハビトゥス論の分析枠組みを通して、学歴意識の階層性を検証しようとした。インタビュー対象者である親の階級は、ブルデューの分類に従い、上層階級と中間階級と庶民階級に分類し、語りの内容から学歴意識を分析した。具体的には、親たちの成功に対する考え方と子どもの将来への望みとの関連性や、努力に対する考え方と子どもの勉強に対する態度との関連性などに着目して分析を試みた。

なおブルデューは、階級を分類する社会的な場についてはさまざまな記述を試みているが、分析の対象地域の分類作業はしていない。そこで本論文では、地域差（首都圏と地方圏）という視点を導入して階級分類を試みた。首都圏としては東京都と千葉県、地方圏としては福島県の都市部と農村部を選定し調査を実施した。

2. 分析結果

(1) 学歴意識の構造とその変化

1975年度は、階層的に不利な位置にいる人びとは、学歴に高い価値を置いているものの、それを自分とは無縁のもののみなし、むしろ、努力して金銭的に豊かになることを志向していたと思われる。それに対して、調査時点で高学歴をもち社会的威信の高い職業的地位にある人びとは、中高生時代から高学歴を志向していたという、過去の意識（＝志向性）と現在の結果との連続性をみてとることができる。また、社会的地位を志向した人びとの学歴志向性は高いものの、経済的な豊かさを志向した人びとは高学歴を志向するよりは学歴の効用を評価する傾向がみられた。

1995年になると、社会的地位や経済的豊かさを志向する人びとは高い学歴に価値を見出し、子どもにも高水準の教育を求めるようになる。これは社会の高学歴化にともない、社会的地位を志向する人びとのみでなく、経済的豊かさを志向する人びとも高学歴を求めるようになったということであるが、高学歴化社会は学歴の社会的価値を低下させていることの反映と解釈することも可能である。興味深いのは、1975年時点で低階層の人びとが抱いていた高いアスピレーションが消滅した一方で、努力信念をもち続けていることである。さらに1975年に低階層の人びとは学歴効用を信じていたが、1995年にはそのような傾向は見えなくなった。その反面、1975年に学歴に対して高い志向性をみせていた高階層の人びとは、1995年になると学校外教育に対しても積極的に関与しようとする意識をみせるようになる。

全般的な傾向としては、1975年から1995年の間に、低階層の人びとの学歴意識が冷却してきたのに対して、高階層の人びとの学歴意識はますます過熱化しているようにみえる。

(2) 学歴をめぐる意識の階層性——語りの分析から——

1) 成功観と子どもの将来像

上層階級の親は経済的にも社会的にも余裕があるため、成功にこだわる必要がなく、そうした志向性から一定の距離を保つことができる。そして、自分の子どもにも「自分の好きなことや社会の役に立つことをしてほしい」といった抽象的で余裕のある発言をするのであり、学歴獲得に子どもを駆り立てるようなことはしない。

中間階級の親は、子どもの教育に投資をする程度の経済力はあるものの、上層階級のように子どもの将来を保障する資産や事業体はもっていない。それゆえ、教育への関心が高く、将来的には、経済的な報酬と社会的な威信の高い専門職や大企業への就職を望むようになる。

庶民階級の親は子どもに教育投資をする経済力に乏しく成功の可能性も低い。それゆえ、社会的上昇よりは、「普通に生活できること」や「給料の安定した職業」を望む傾向が顕著であった。またそれとの関連で「資格」へのこだわりも高い。

2) 努力観と勉強観

中間階級の親は、将来志向性と上昇意欲が強く、努力の重要性を強調する。彼らは、勉強への意欲を駆り立てつつ子どもの日常生活にも介入しており、子どもの生活態度に不満をもつことも多い。それゆえ、勉強をめぐる子どもとの間に葛藤が生じやすい。

上層階級の親は十分な余裕をもっているため、他者からの承認や他者との競争から距離を置くことができる。そのため、成績向上を目的とした勉強からも距離を置くことが可能となる。庶民階級の親たちは、上層階級とは異なる理由で成功志向から距離を置き、子どもの成績に執着することも少ない。

3) 学歴観

ブルデューのいう正統的な文化資本という観点からすると、日本社会においては、高い学歴こそがその地位を占めているといえる。本論文で分析した中間階級の親たちの語りのなかにも、高い学歴を正統的なものとみなし神秘化する態度がみられ、学歴が人物評価にまで影響を与えている様子がうかがえる。

経済的な上層階級は子どもに与える資産があるゆえ学歴に対する執着がない。学歴のもつ価値から自由であり内面的な価値を重んじるこのような上層階級の視線は、実用性を優先する庶民階級の視線とは対立的な構図をとることになる。

4) 子どもの学校選択

私立の小中学校を選択するかどうかは階級によって異なる。上層階級はエスカレーター式の私立学校と、中間階級は私立学校と、庶民階級は公立学校と、それぞれ親和性が高く、特定の学校に対する親の考え方も階級によって異なる。

上層階級の親たちは、大学進学まで保証されているエスカレーター式の私立学校の特殊性を自覚しつつ独特の価値を見出している。中間階級の親たちは、学力低下や学級崩壊のリスクから公立学校に対する不信感を抱き私立学校を志向している。庶民階級の親たちは、私立学校に通わせる経済的余裕がなく選択肢から排除している。結果として、公立学校を「選択」するのではなく、「現実に合わせて」ことになるが、そのような現実を受け入れ順応することで「自分にふさわしい選択」をしたと思うようになる。

5) 学歴意識の地域差と階層差

地方圏では製造業や農業のような一次・二次産業の比率が高い。また、地方に本社のある企業のほとんどは中小・零細企業である。それゆえ、上層レベルの階級が存在せず、全体的な経済水準も首都圏に比べると低くなる。

地方圏の中心都市では首都圏と類似した階級ハビトゥスがみられるが、農村部においては、首都圏とは明確に異なる様子をみせている。庶民階級の場合は、首都圏と同じように、プラグマティックなエトスに基づいた考え方をしており、子どもに対しても大卒学歴にこだわらず就職に有利な地元高校を選択する傾向がある。しかし、中間階級と上層階級の場合は、その地域で所属している階級の位相と彼らが所有している資本との不一致から、学歴意識の階層性が複合的な様相を呈している。

たとえば、福島県の農村部で教員を3代続けて輩出している家はその地域では上層階級に相当するが、首都圏の基準からすれば所有する資本は中間階級に相当する。それゆえ、息子の通学する進学校の教育方針を批判する余裕をもちつつ、中間階級的な高学歴志向をあわせもっている。あるいは、その地域では経済的にも社会的な位相にも中間階級にあたる父親（農民）が、子どもに対しては地元就職に有利な学校選択を希望しており、大卒学歴の必要性を感じていない。このように、地方圏の農村部における上層階級と中間階級の親たちには、その地域での社会的な位相と所有している資本との間で不一致が存在しており、そこから学歴意識を構成するハビトゥスも、社会的な位相にふさわしい場合と所有している資本にふさわしい場合という二つの傾向が混在するようになるのである。

論文構成

第1章 序論

1. 問題提起

- (1) 学歴意識の構造と変化に関する分析
- (2) 学歴意識の階級性に関する分析

2. 研究の方法

3. 新しく設定した操作的用語の定義

- (1) 「成功志向性」
- (2) 「メリットクラシー信念」
- (3) 細分化した学歴意識

第2章 学歴社会の変遷過程

1. 戦後体制の出発と高度成長による社会変動

- (1) 国民の生活パターンの変化
- (2) 職業構造の高度化

2. 学校教育の大衆化と高学歴社会の出現

3. 教育的選抜システムの保守化

- (1) 早期選抜システムの形成
- (2) 学校間序列構造とトラック構造

第3章 学歴をめぐる意識の構造と変化

1. 「成功志向性」の社会経済的な特性

- (1) 1975年度における「成功志向性」の社会経済的な特性
 - 1) 1975年度における「成功志向性」の社会的な特性
 - 2) 1975年度における「金銭志向性」と「地位志向性」の社会経済的な特性
- (2) 1995年度における「成功志向性」の社会経済的な特性
 - 1) 1995年度における「成功志向性」の社会経済的な特性
 - 2) 1995年度における「金銭志向性」と「地位志向性」の社会経済的な特性

2. 「メリットクラシー信念」の社会経済的な特性

- (1) 1975年度における「メリットクラシー信念」の社会的な特性

- 1) 1975 年度における「メリットクラシー信念」の社会経済的な特性
- 2) 1975 年度における「才能信念」と「努力信念」の社会経済的な特性
- (2) 1995 年度における「メリットクラシー信念」の社会経済的な特性
 - 1) 1995 年度における「メリットクラシー信念」の社会経済的な特性
 - 2) 1995 年度における「実績信念」と「努力信念」の社会経済的な特性
3. 高度経済成長期以降の「成功志向性」と「メリットクラシー信念」の社会経済的な特性
 - (1) 1975 年度と 1995 年度における「成功志向性」の社会経済的な特性
 - (2) 1975 年度と 1995 年度における「メリットクラシー信念」の社会経済的な特性
4. 「成功志向性」と学歴意識
 - (1) 1975 年度における「成功志向性」と学歴意識
 - (2) 1995 年度における「成功志向性」と学歴意識
 - 1) 1995 年度における「成功志向性」と学歴意識
 - 2) 1995 年度における「金銭志向性」と学歴意識
 - 3) 1995 年度における「地位志向性」と学歴意識
5. 「メリットクラシー信念」と学歴意識
 - (1) 1975 年度における「メリットクラシー信念」と学歴意識
 - (2) 1995 年度における「メリットクラシー信念」と学歴意識
 - 1) 1995 年度における「メリットクラシー信念」と学歴意識
 - 2) 1995 年度における「実績信念」と学歴意識
 - 3) 1995 年度における「努力信念」と学歴意識
 - (3) 1975 年度と 1995 年度における「メリットクラシー信念」と学歴意識との関係の比較
6. 学歴意識の構造とその変化—メリットクラシー社会観の変化と関連して
 - (1) 「成功志向性」と関連した学歴意識の構造とその変化
 - (2) 「メリットクラシー信念」と関連した学歴意識の構造とその変化

第4章 学歴に対する親の語りの分析

1. 問題関心
2. ブルデュー理論とハビトゥス論
 - (1) 再生産論
 - (2) 階級論
 - (3) ハビトゥス論
3. インタビュー調査の概要
4. 首都圏における学歴をめぐる親の語りの分析——親の階級とハビトゥスを中心に——
 - (1) 首都圏における上層階級の親の学歴をめぐる語りの分析
 - 1) 子どもの将来像と学校選びの語り
 - 2) 成功と努力に対する語り
 - 3) 学歴に対する語り
 - (2) 首都圏における中間階級の親の学歴をめぐる語りの分析
 - 1) 子どもの将来像と学校選びの語り
 - 2) 成功と努力に対する語り

- 3) 学歴に対する語り
- (3) 首都圏における庶民階級の親の学歴をめぐる語りの分析
 - 1) 子どもの将来像と学校選びの語り
 - 2) 成功と努力に対する語り
 - 3) 学歴に対する語り
- 5. 地方圏における学歴をめぐる親の語りの分析——親の階級とハビトゥスを中心に——
 - (1) 大都市圏と地方圏との格差と階層関係
 - 1) 日本における地域間階層性
 - 2) 地域性と社会階層
 - (2) 地方圏における階層とそのハビトゥス
 - 1) 地方圏における上層階級の親の学歴をめぐる語りの分析
 - 2) 地方圏における中間階級の親の学歴をめぐる語りの分析
 - ① 地方圏の都市部における中間階級
 - ② 地方圏の農村部における中間階級
 - 3) 地方圏における庶民階級の親の学歴をめぐる語りの分析
- 6. 学歴をめぐる親の語りとハビトゥス
 - (1) 子どもの将来像と学校選びに対する親の語りから見える階級とハビトゥス
 - (2) 成功と努力に対する親の語りからみえる階級とハビトゥス
 - (3) 学歴に対する親の語りと階級的ハビトゥス
 - (4) 学歴をめぐることに對する親のハビトゥスの分析の意味

第5章 結論

- 1. 現代日本における学歴意識の構造と変化
 - (1) 「成功志向性」と「メリットクラシー信念」の社会経済的な特徴とその変化
 - (2) 学歴意識の構造とその変化
- 2. 学歴意識の階級性
 - (1) 成功と努力に関する親の意識と態度
 - 1) 親の成功観と子どもの将来像における階級性
 - 2) 親の努力観と子どもの勉強への姿勢における階級性
 - (2) 学歴に対する親の意識の階級性
 - 1) 親の学歴観における階級性
 - 2) 子どもの学校における階級性
- 3. 研究の限界と今後の展望
 - (1) 研究の限界
 - (2) 今後の展望
 - 1) 上層階級の正統的文化とその変化に対する分析の可能性
 - 2) ライフ・ヒストリーを通した、重層的ハビトゥスの構造と形成過程の分析の可能性
 - 3) 日韓の比較研究を通したアジア型の教育熱の発生と変化の分析

〈参考文献〉